ヘルマン・ヘッセ，「議会外野党」*，ならびに他のアウトサイダーたち

ハンス・ヨーアヒム・シュタイン
藤　井　啓　行　訳

——そこで多くの人々が目覚めた．そして彼らは今や，
自分の外部の誘導や戒律が全くひどいものであることが
判ったので，指導者を自分自身の中に捜すのである．
（ヘルマン・ヘッセ）

序　　言

これまでしばしば，ヘッセは特に，若い世代の作家であることが強調されてきた．彼の読者の半ば以上は14歳ないし30歳の年齢群に属し，それに続くのが年金生活をおくる読者たちであって，35歳ないし60歳という，社会の第一線で活躍中の世代は，極めて僅かなパーセンテージしかその読者層において占めていない．ところでこの小論で私が検討の対象とするのは，西ドイツにおける，1960年代の半ばから70年代の初めにかけて，社会的ならびに政治的な発展に局外者として対立した者たちではなくて，部分的に過激な変化の試みに，極めて積極的に参加した若者たちの集団である．（その参加のしかたについては，いわゆる「既存制度の中の行進」として，社会的制度ならびに政治的党派の内部において行われる場合もあったが，若者たちの圧倒的多数は，社会的承認を得た既成の形式に則る集団の外部にあって，いわゆる議会外野党の一員ならびに同調者として，活動した．）それは彼らにとって，極めて大きな社会的期待を寄せ得た時期，

過度の楽天主義の時期，自身の持久力を過大評価した時期で，つまり，理想郷の実現が可能であるように見えたのであった．しかしそれはまた，社会的な旧体制の情勢や経過を強化・復活させる，伝統に基づいた政治的・社会的な機構や勢力の活動というものを，過小評価した時期でもあった．前述の社会的な情勢や経過なるものは，明らかに，過去および現在において後期資本主義の大衆社会と消費社会との枠を超えた個人的欲求を満足させることが，もうとっくに出来なくなっていることが明瞭になったばかりか，またこの欲求を無視したり，或いは国家の権力に沿ってそれに対抗したのである．

なお小論で取り扱おうとする今一つのものは，既成の社会の外部にありつつ，また政治的指向の議会外野党からも離れて活動していた諸集団である．そのさい拙稿の検討は，特にヘッセの作品自体からは出発せず，これらの若者たちをヘッセの作品へと導いた動機や発展過程を前面に押し出していくものである．

1. ヘッセと議会外野党との相違点

その挫折を知らぬ活動と社会的・政治的な部分的成功の時期には，議会外野党は，ヘッセに関わる意図を極く僅かしか持たなかった．いかにもそれは，ヨーロッパの従来のイデオロギーに対する幻滅，消費への陶酔や浪費社会や下層階級の不利益などに対する嫌悪，人間の心情的・精神的エネルギーと，それらのエネルギーを倒錯させ無力化していく市民社会の制度との間の，緊張や矛盾についての考えかたを，ヘッセと共有してはいた．しかし，悲惨な状況をもっぱら個人的に克服しようとする，ヘッセの道ないしは試みは，そのまま議会外野党グループの道や試みとはなり得なかった．

ヘッセは彼らの目には，世間離れした一種の夢想家であり，散漫な「内

面性」の小説家で，政治的な気骨を欠いたどうにもならない個人主義者であると映ったわけである．そしてこのように政治上のバックボーンを欠く個人主義者と考えられたのは，ヘッセが，或る政治的方向に従ったり，或いは更に，特定の政党を支持したりすることを，生涯を通じてきっぱりと拒絶し続けたからだった．これは，近代のドイツの最も革命的な段階，つまり第一次大戦後の革命の時期においても，例外ではなかった．ヘッセは1930年の，『或る若い人に宛てた手紙』の中で，次のように述べている．「紛れもない不合理さを持ちつつも，人生にはやはり一つの意味があると，私は信じています．……この意味の声を，私は自分自身の中に，実際にそれこそ生き生きと私が目覚めている瞬間に聞くのです．……この信念を人は命じることも，またこの信念を持つよう自分自身に強制することも出来ません．それはただ体験することが可能なだけです．……これが出来ない者は，その信念を教会に求めます．また或いは学問に，愛国者たちや社会主義者たちに，或いはまた，既成の道徳やプログラムや処方箋があるどこかに求めるのです.」ヘッセのこのような発言を，議会外野党は最初のうち，自己中心的な個人主義であると片付けた．いわゆる進歩的な若者たちは，自分が彼によって，或る「教義」の単なる信奉者であるとして誹謗されたように感じた．その「教義」にあっては，彼らはとにかく，自分たちによって宣伝された，反圧殺的にして創造的な或る社会主義の形式こそが，社会全体の枠組においても，また個々人の人間同士の間の関係においても，共同生活の，唯一にして全く独自の形式だと確信していたのである．そしてその際，特に人間相互の間の関係においては，この領域の中で，またそうこうしている内には，あらゆる面にわたって解放的な方向をとった，学生反乱の担い手たちに対して，60年代の終りにはまだ全く拒否的に対立していた社会層の中ででもまた，新しい発展の招来する成果が得られるべきであった．ここで例えば，今日多数存在し，もはや学生たちの専有物ではなくなった居住共同体を考えてみるがよかろう．それらの居住

共同体は，どのような極左的あるいはヒッピー的な生活態度とも関りなしに，共同生活の新しい形式を求めているが，その理由は，共同生活の旧来の形式が，彼らにとって役に立たないものであることが明らかになったからである．

議会外野党グループは，ヘッセが二度の世界大戦中ならびにその前後において，とりわけ彼の手紙が明瞭に示しているように，すばらしくも明確に政治的な信念を披瀝したことを，見逃してしまった．強い疑念を伴いつつも，ヘッセの共感は社会主義的な運動の方向に向けられていて，彼はこの方向を，人類が辿らざるを得ない道と看做したのであった．ところが政治的・社会的に活動的な若者たちには，ヘッセは，紛れもなく政治的な方向をとったあらゆる集団を等しなみに扱って，同一尺度でこれらを測り，彼らがまさに「政治的」そのものであるからこそ，彼らをいとも無造作に拒絶するという過誤を犯した人物である，と考えられた．この点においても議会外野党は，ヘッセが極めて深く鋭く，個々の政治的集団の方向をそれぞれ区別し，ファシズムとコミュニズムとを決して等しなみには扱わなかったことを，見すごしていると言わざるを得ない．この両者を峻別する理由について，フォルカー・ミヒェルスは次のように述べている．「ファシズムの試みは退行的で低劣だが，コミュニズムのそれは，人類がなさざるを得ないものである．そして悲しくもまだ非人間的な領域から脱け出せないでいるけれども，それは何度でも繰り返してなされるべき試みである．その理由は，愚かしい≪プロレタリア独裁≫の実現のためではなく，市民階級とプロレタリアとの間の正義や友愛のようなものを実現するためだ．」

ヘッセにもまた，人間としての行動には政治的な行動も含まれるという原則が通用した．しかしながら，それにもかかわらず彼にとって最も重要なものは，あらゆる行動，あらゆる目標の最高の規準としての個人であった．つまり，ヘッセ自身のように，すべての政治と政治組織から離れて生き，そして殆んど常に苦しみ続ける人間なのであった．

ヘッセ，ならびに議会外野党の当時の綱領という，両者に認められる，人間実現のそれぞれの内容や目標の間には，実は驚くべき相似点がある．だが，次のような重大な相違も依然として存在するのである．つまり，ヘッセは，これらの目標への方向において，政治的な結び付きを持った行動は，そのいずれをも一般的に拒否するが，当初の議会外野党グループはこれに反して，伝統的な組織に反抗する政治的な行動においてこそまさしく，どの人間にも客観的に内在するものと彼らが考える彼ら自身の願望の，実現への或る可能性を認めたのであった．それ故，ただ極めて漠然としたかたちで一般的にしか表現されていない彼らの目標設定において，なるほどヘッセ同様，人間の自己発見や自己実現が問題になってはいるが，しかし，その手段と方法とは政治的なもので，部分的にはまた，政治的に暴力的なものでもある．なぜならば，彼らには暴力もまた，それをどうしても必要と考えたときには，さまざまな示威行動の際の暴力行為などにも見られる通り，目標実現のための適切な手段として通用したからである．反対側である支配組織が，彼らの見解によれば，直接あるいは間接の暴力に基づいているから，必要の際には，自分たちの手段でこれを撃破しなければならない，と彼らは考えたのであった．

周知の如く，ヘッセは生涯を通じて，どのような形式の暴力にもきびしく対立した．そしてそれに応じて彼には，マハトマ・ガンジーにおいて最も純粋な姿で代表されていると見た非暴力的政治の形式のみが，ただ一つの受け入れうる道であると思われた．

従って，それまでのところでは，当時の大きな青年運動とヘッセとの間には，取り上げるべき確たる共通点が存在しなかった．その後どのような進展がこの運動の内に起ったかは，のちに示すこととしたい．

2. 「絶対的拒否」の集団

個々の人間同士の間で，そして一部ではまた政治的な領域においても部分的に成功を収めたことは，社会的・政治的活動分子の若者たちに対して，その態度の正当性を確証することとなった．当時，いわゆる反権威主義者たちは，それ自身のグループ構成では，決して専ら反権威主義的にのみ組織されていたわけではなかったが，とにかく政治的に多かれ少なかれ義務付けられた道を持っていた．ところでまた他方では，この道が，他のことはさしおくとしても，或る隷属状態の中にひたすら通じるだけだという，極めて明確な根拠のある理由で，当時すでにこれを拒絶する人々もあった．前述の成功は，社会的・政治的な活動分子に，上記の人々に対抗する上で，これまた同様に頗る明確な論拠を与えることになったのである．この集団は，既存の社会から離れると共に，また政治的な動機付けを持つ議会外野党に対しても距離をおいていたので，ここではこれを，絶対的拒否のグループと名付けておくことにしよう．ヘッセは，およそ政治的な組織は，それが社会主義的，或いは市民的・資本主義的の，いずれの方向を取るにせよ，かつて個人の幸福に寄与したことがなかったし，また今後もないであろうと確信していたが，前記のグループもこの確信を共有した．この幸福，つまり自分自身の認識と実現を，個人はただ，自分の中で自分と共に自分によってのみ達成しうるのであって，政治的に行動的な，政治的に縛られた人間，従って隷属的な人間には達成不可能であると，このグループも考えた．いま隷属的と言ったのは，政治的人間が，彼ら自身の中から生まれ育っていったのではないプログラムや目標に従っているからである．われわれ自身とは無関係に生じた数多くの制限や束縛は，ヘッセの言葉を借りるならば，その中にわれわれが，言わば生みつけられるところのものである．それ故，自己発見と自己実現の道がもしあり得るとすれば，その道をただ，われわれが，殆んど打ち勝ちがたい数々の障碍に逆ら

うことによってのみ，われわれの内と外とに見いだし歩き始めることが出来るだろうと，このグループは考えた．

彼らは今や，前代から引き続き次第に強まる桎梏から専ら個人的に解放される道を，ひたすら求めていった．そして彼らの，例えば居住共同体とかコミューンというような形をとった結合は，個々の人間を，主として人間同士の間に見られる束縛から，この束縛の分析と認識とを通じて解き放ち，その認識に応じて，新しい道や形式を存分にためしてみるという趣旨に沿って企てられた．そしてそれは，例えば政治的に積極的に活動する或るグループの一員として，明らかに政治的な背景を持ってその方向をとる議会外野党メンバーのコミューンとは，対立するものであった．

この運動の主体のうち，最も著名なものはヒッピーである．もっとも私はここで，いわゆる風俗だけのヒッピーは除外したい．それはつまり，単に漠然とした浪漫的なポーズから「花の子供たち」になってしまった若者たちのことだが，彼らは決して，自分自身との真剣な対立を試みることがなかった．彼らは往々にして，頽廃的な若者として市民社会を，また大地に根ざしたヒッピー運動をも一再ならず不安定なものにしたのち，早々と市民的快適さへの帰途についたのであった．だが，この種のものを除外するとき，このヒッピー運動の真摯な部分は，今日なお部分的には，数多くのグループの形で生き続けている．これらのグループは，高度に，ないし過度に工業化した産業社会から，特に田園的な地方へと引きこもって，そこで農民的な，しばしば自己扶養をめざすささやかな共同体を営みつつ，彼ら自身の道を探求しているのである．この運動は，同様に更に，さまざまな社会的領域において，政治的な拘束はうけずに自律をめざしていく居住共同体，その他の多種多様な集団，また住民運動団体の形で存続している．この点においてヘッセは，彼らにとって最初から，自分自身との対決の，不変の構成要素であったし，また今もそうである．

3. 「潜在的不満者たち」

このグループを規定するには，若干の困難が伴う．なぜなら，このグループは，何らかの形で公然と現れるまとまった集団の，いずれの一つにも属さなかったからである．時としてこのグループ内の個々人は，先述の大きな集団の内の一つに加わった．われわれはこの点において，自身の不快さを，必要とあれば，ただ極めて曖昧な，歯切れのわるさで表明するに過ぎなかった不満者たちの姿を見いだすのである．その不快感は，彼ら自身に大部分が意識されなかった．彼らは，社会における彼ら自身の将来性の欠如について自覚せず，また，その将来性の無さから内的に逃れつつ，実践において他の道を試みるということも出来ず，この無知と無能とに苦しんだ．というのも，組織ならびにその組織の機構に彼らは非常に強く拘束されていたので，ただ大変な努力を重ねることによってしか解放されなかったからである．このグループの内，そのような解放を一時的にせよなし得た人々は，その際に生じた空隙を，先述の集団への依存によって埋めようと努めた．その折に何人かの人々に，自己の情況をいっそう意識的に把えつつ解決の可能性を求めるということに当って援けとなったものに，他の要因にまじって，またヘッセの作品もあった．だがそれ以外の人々には，ヘッセは，ただ埋め合わせの読み物の役割を果しただけである．

4. 議会外野党グループ内部での変化

1970年代の初めには，主として突然の思い付きから直接出て現体制に反抗はしたものの，調整が不充分だったというこれまでの運動のありかたが，長期的展望の観点からは，いたずらに疲労をもたらすものであると共に，またその大部分が不毛のものであることも，明らかになった．学生以外の大衆的動員の計画は，ほんの僅かしか実現には到らなかった．国家権

力は，当初の当惑的な状態から立ち直り，意図的なすさまじい反撃を試みてきた．共通の具体的な計画の欠如，いわゆる政治的展望の欠落が，一般に弱点と感じられて，討論の対象となった．この時点において，議会外野党は次第に崩壊しはじめたのである．

これまでは，相対的な無計画性が，反ってこの運動に役立ってきた．というのも，この相対的無計画性が，一般的に立てられたプログラムと説明の故に，現存の諸状態に対し不満を懐く人々の広範な層にとって容易に受け入れうる，いわば溜池となったからである．政治的な方向はとっていたけれども，個々の議会外野党グループはまだ，どこかで各人に自由の余地が残りうる程度には開かれていたのであった．だが今や，厳格な組織化の試みの段階となり，この組織化運動が大部分，求心性の原則に従った．その際に判然としたのは，いわゆる反権威主義的なこのグループもまた，これまで決して反権威主義的な構成ではなかったことである．なぜなら，これまでは単に「理論的な指導者」として，この運動の一種の座標軸であったに過ぎないメンバーが，プログラムと組織との動向を，しばしば全く権威主義的なやりかたで，自動的に決定するようになったからであり，彼らの権力が明らかな形をとってきたからである．プログラムならびに組織の趨勢は，ますます公然と，中国ならびにソ連の，伝統的な，権威主義的・共産主義的政党から，修正した形で引き継がれた．この運動の基盤は，投票権の溜池としての性格を次第に強め，そしてその行動においては，国家権力に対抗する「道具」として悪用される性格を漸く露骨に示してきた．内部的対決ならびに個々の組織間の対決もまた，しばしば極めて非連帯的に行われたのであった．

今や運動のメンバーの大部分は退いてしまったのだが，しかし彼らは，市民社会の日常の流れの中に立ち戻ったのではなく，自分たちが本来この運動から期待したものは何であったのかと，深く反省しはじめた．大多数の者はその際，自己実現，解放，個人的ならびに社会的な桎梏の認識と克

服というあの合言葉が，彼ら自身をこの運動に導いたのだという答えに達した．多くの者がまた，彼らの個人的な欲求は，これまでただほんの最初の内だけ配慮されたに過ぎず，しかもその欲求は今や，この運動によって反ってすっかりねじ曲げられる怖れがあると認めるほどに，充分現実的になっていた．彼らは個人的な自己認識・自己実現を得ようとする努力の中に救いを求めて，マルクスやバクーニンや毛沢東から諦めの気持を懐いて離れ，これらの救いを，その代りに，今では既にいっそう古いものとなっているビートニック文学（例えばジャック・ケルアックやコリン・ウィルソン等）の中に，禅仏教の哲学ならびに文学（鈴木大拙，ジュルケーム，ビ・エン・ルー等）の中に，そしてとりわけ，ヨーロッパならびに仏教，この両者の考えかたの間の，一種のつなぎリンクであり懸橋であると看做されるヘッセの中に，見いだしたのである．この場合『シッダルタ』が，それに応じて，ヘッセの最もよく読まれた作品の一つであった．彼らは，今やこれらの新しい理想像により，また自己の体験を通じて，自己発見と自己実現の手段としては，政治は極めて不毛であるとの確信を得た．

興味深いことに，ここに到って，第２章で取り扱われた絶対拒否のグループと，政治的方向に進む議会外野党に幻滅した若者たちとが，互いに交わりはじめた．この共通の道は，現在まで中断されてはいない．

ところで以前の議会外野党グループの内，前記以外の他の部分は，例えば体制側諸政党と合流することによって，或いはまた，バクーニンやプルードンの無政府主義的なイデオロギーを，より強く権威的な教義や教師たち（マルクス，毛沢東，レーニン）にしがみつく連中とは袂を分って，更めていっそう明確に取り上げることにより，彼ら自身の諦めの埋め合わせをつけるという他の道を求めた．この運動の担い手の或る部分は，例えばいわゆるバーダー＝マインホーフ＝グループのように，政治的手段としての暴力の使用という観点において過激化した．暴力はそこでは，殆んど唯一絶対の政治的手段と看做され，自己目的へと「前進」するまでに，絶対化

されている．一方また以前のグループのうち更に別の部分の人々は，すっかりその種の運動から退いてしまい，再びひたすら勉学と出世をめざす道に没頭するに到った．

5. 「絶対的拒否」グループの内部における変化

このグループのうち極く僅かの部分は，議会外野党の最盛期に，当初だけ一時的に政治化し，そして若干の場合にのみ，留保付きでその運動に参加したのであった．この連中の運動の発展はしかし，正統派的共産主義イデオロギーの権威主義，ならびにその他の教条主義的な諸原則を，議会外野党がますます顕著に受け入れていったために，再び中断させられた．最初のうち議会外野党の「反権威主義的」な本質に魅力を覚えていた青年たちは，自分自身への道，自分の本質への，また自分の本質の，全体に対する関係への道が，政治的な結び付きを持った社会的活動を経て通じているものではないことを，認識した．そこで彼らは，再び以前の指導者像へと向きを変えた．それはとりわけまたヘッセへの方向だったが，しかしそれは大抵の場合，或る偶像への，意識的ないしは無意識的な願望という形をとることなく，人々はヘッセを，なかんずく自分の道を求める際の補助手段と看做したのである．

この絶対拒否者グループの或る部分にとっては，道は極めて危険な軌道の上に通じていた．この道と結び付いているさまざまな困難さのため，若干の青年たちは，問題を麻薬によって補償するか，或いは更に，麻薬それ自身の中に「道」を見るようになった．彼らは，この点でもヘッセを支えとすることが出来ると考えた．何しろヘッセは，麻薬を自己発見と意識拡大のための手段として吹聴するアメリカの麻薬教授ティモシ・リアリによって，1963年に既に「サイケ体験の巨匠」とたたえられたのだから．これは，ヘッセの作品の中でも最もよく読まれた『荒野の狼』と『シッダル

タ』とを，引き合いに出したものだが，この解釈の致命的な誤謬については，これまでにもしばしば指摘されたところである．

6. 全般に——どうしてヘッセを？

殆んどすべてのヘッセ文献は，ヘッセ・ルネサンスが，これまで常に，全般的な危機の時代に招来されてきたという見解を打ち出している．その見方はたしかに正しい．なぜならば，徹底した危機情況にあっては，自己確認の困難さと，存在の意味についての問いかけが，「正常な」時代においてよりも，いっそう広範な社会層にとって問題となり，より露わな姿を示すからである．しかし，ヘッセと関りのある諸問題は，危機情況とは本来は無関係に存続し，多くの人々によって，そのような時代以外においても感じ取られ，そして真剣に処理すべく試みられるものである．量的に見ると，危機の時代には，たしかにいっそう多数の人々が，自分自身に関する問題と対決する．それは，自己確認の外的可能性の欠落のために空隙が生まれたからである．質的にはしかし，真摯な意志や消費されたエネルギーの量という点から見るならば，いわゆる正常な時代に対して，重大な相違は確認されないと考えられる．限られた期間の，外面上の危機の時代というのは，やがて過ぎ去っていくか，或いは，人々はその時代に馴れてしまい，そして多くの「ヘッセ信徒」はヘッセへの関心を失ってしまう．ここで想起されるのは，それがいかに必要なものであったにせよ，自分の作品の，例えばポケット版によっての大量普及に対する，生涯を通じてのヘッセの嫌悪である．『ガラス玉遊戯』が初めてポケット版として公刊されることになったとき，ヘッセはそれをまさしく，自分のライフワークの「呼び売り」,「投げ売り」であり，「見切り売り」であると感じたそうである．読者数のことは，彼には殆んどまるで問題でなかった．肝心なのは，自分の読者の真剣さであり，質であった．他のすべては，ヘッセにとって

むしろ煩わしいことであった．

戦争と濫費との間におかれたわれわれの存在，恒久的な環境破壊，原子力の脅威，ますます完全な機能を発揮する技術による奴隷化，殆んどすべての生活領域に及ぶ物質化，これらはみな無意味な愚行そのものである．それにもかかわらずヘッセは，人生にはやはり一つの意味がある，と繰り返し述べている．つまり，他者の決定に対するすべての個人的な戦いにおいて，また，全体への関りの中で自分自身を実現するための戦いにおいて，意味が認められるのである．ヘッセは文学という形式で，直接あるいは間接に，自己への道を見いだそうとする試みを示している．その際つねに明確であったのは，その作中の人物たちが，作者自身と問題を共にし，そしてヘッセ自らが，ボルノーの言葉を用いれば，「内面への，静かさの中への，自分自身への，家への道」を求めている人々のすべてにとって，一個の誠実な苦しみの友のような存在であったということである．この澄明な信念とならんで，ヘッセが特に，懐疑的にして権威批判的な若者たちをして，彼に対する不動の信頼を懐かしめたものは，彼自身の経験より出た原則，すなわち，すべての「既成の」合言葉に対する不信という原則なのであった．

＊ドイツ語では，ふつう略してＡＰＯ（アーポ）と言っている．西独における反資本主義的・反帝国主義的な左傾グループの，政治的連帯活動をめざす弛い組織で，特に1960年代の終りに，既存の政治的・社会的な秩序に満足できず，その拒否と批判の意志を，民主主義的な制度の外で，例えば挑発的な抗議行動などによって表現した学生たちや若者たちが，その担い手である．（訳者注）

訳者のあとがき

以上の興味ある論文は，現在天理大学ならびに大阪ドイツ文化センター講師として勤務中のヘッセ研究者 Hans Joachim Stein 氏の》Hermann Hesse, die „Außerparlamentarische Opposition“ und andere Außen-

seiter≪の，原文に「忠実」な翻訳である．ただし，同氏のやや特異な文体をなるべく「平明」な日本語に移そうとして，若干の個所で，文体的に多少改変の手を加えたことを，念のためここで申し添えておきたい．脱稿直後の同論文が私の手許に送られてきたのは1978年7月のことで，それはズーアカンプ社から近刊予定の≫Über Hermann Hesse≪第3巻（現在未刊）の中に掲載される彼の原稿の，コピーだということであった．そして，その論文の紹介ないし翻訳を，もし可能ならば，日本ヘッセ協会の機関誌≫HESSE≪の次号にでも本人のために書いてみようと私が思い付いて，彼にその旨を伝えてから，ちょうど1年の歳月が経過した．その後，翌年の2月には同協会会長の四反田氏から翻訳掲載の諒解も得られたが，私自身の公私にわたる繁務多用のため，その完訳が今日まで延び延びになってしまったのであった．

ここに記して，シュタイン氏にご報告申し上げたい．

1979年7月，訳者

ところで，上記の≫HESSE≪（第6号）は，その後に不測の諸種の事情が重なったため，予期に反して今日まで刊行に到らず，なお当分その目途もついていないようである．こうして，ヘッセ受容の，殊にわが国では一般に殆んど知られていない側面についての，この啓蒙的に貴重な論文の拙訳が，その脱稿後すでにかなりの時日を経過してしまった．そして私は，更なる遷延によって，紹介の意味が減殺されることがあるのではないかと案じたのだが，このたびさいわいにも，右の≫HESSE≪第6号にかえるに，関西大学独逸文学会の機関誌『独逸文学』第25号の『紹介』欄に，発表の機会が得られることとなった．そのことを私は心から喜ぶと共に，関係各位のご好意に謹んでお礼を申し上げたい．